

左官の技術を現代の空間デザインに活かす

～版築をはじめとする左官技術を用いたデザイン提案～

A2201622 畠山 杏花

研究の背景

近年では左官技術が必要な工事が減ってきている。そのため、左官技術者はそれぞれに高度な技術を持ちながら力を発揮できていない状況にある。しかし一方では、珪藻土や漆喰、土などの自然素材を用いた環境にやさしく味わいを持った左官仕上げの壁等が再び注目され始めている。その中でも、法隆寺や万里の長城にも用いられている版築という技術に目を向けた。版築とは、壁や基礎をつくりたい部分に板などの当て枠をつくり、土などの材料を詰め強く突き固める方法である。左官技術のさらなる発展に繋げるため、現代社会に受け入れられやすいデザインとは何なのかを考え、研究を進めていく。

研究の目的

左官技術者の後継者不足や仕事の減少に目を向けて、現代の生活の中で再評価され左官技術者の仕事の幅を広げられるような、使われるデザインの提案を行いたいと考えた。土を身近に感じてもらう一番の方法は、家の中に「土」があることだと考えた。

版築という技術は、昔と変わらず現在も様々な地域で役立てられている。しかし美しい模様を持ちながらその活用方法は壁や土塀に留まっており、現代に普及させるには難しいものとなっている。本研究では版築技術のデザインの幅を見せ、現代に活かせる力添えになることを目的とする。

研究のプロセス



◎ヒアリング・企画協力依頼及び取材について

○平成 29 年 7 月 15 日

原田左官工業所さんへ 左官の現状について取材及び企画提案。

- ・昔 30 万人程いた職人さんは、現在は 5～6 万人に減少。
- ・土壁が見直されているが影響は微々たるものである。
- ・左官技術を生かしたいがニーズは分からない。



↓企画書の一部



